様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５７０

研究課題名（和文）並列表現形式の生成と展開に関する研究

研究課題名（英文）Study on generation and development of parallel representation form

研究代表者
京　健治（KYO, KENJI）

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：６０２８４０１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：日本語において、並列表現が如何なる展開を遂げ、現在見るような姿になったのかという課題については、これまでのところ、この問題を正面から取り扱った研究はそれほど多くはない。本件研究は、そうした研究状況を鑑み、並列表現に与る形式のいくつかを取り上げ、当該語法の生成と展開に関する考察を行い、並列表現史の一端を明らかにしようとしたものである。具体的には、「一は（も）一終止形」による中止法（本研究ではこれいを不十分終止用法と呼ぶ）による並列用法の展開を考察し、また、「ば」による並列表現について、条件表現形式から如何にして並列用法を派生させたのかを論じた。

研究成果の概要（英文）：As far as the problem of how parallel expression has developed in Japanese and it looks like what you see now, so far there are not so many studies dealing with this problem from the front. In this research, in consideration of such research situation, I tried to clarify some form of parallel expression, consideration about generation and development of the formalism, and to clarify a part of the parallel expression history. Specifically, we consider the development of parallel usage by the cancellation method by "- (also) - stop type" (this is called insufficient termination usage in this study), and on parallel expression by "ba" , I discussed how the parallel usage was derived from the condition expression form.

研究分野：日本語学

キーワード：並列表現　不十分終止用法　「ば」による並列　シシ語尾形容詞　文法史　「～ツ～ツ」　例示並列　反復並列

１．研究開始当初の背景

日本語の並列表現に与る形式は、多種多様である。現代語の並列表現に与る諸形式に関する記述的研究は盛んに行われてはいるもの、その史的研究に関しては、古代語ではどのような形式が存したのか、また、現代語にいうところの種々の表現がどのような経緯で成立を見たのか、また、そのように展開を遂げたのかという点については、不明な点が多く、まだまだ未開拓の研究分野であるといえよう。並列表現に与る助詞の成立に関する問題をはじめとして、他の表現形式からの転成の経緯など、日本語並列表現史を記述する上での基礎的な作業が不十分であるというのが、当該表現に対する現状であろうと思われる。尤も、助詞の成立等に関しては、個別の事例を取り扱うものは無いわけではないが、これまでのところ、当該表現全般を見据えた研究は殆ど為されていない。申請者は、これまで、現代語において並列表現に与る助詞（「し」「たり」「なり」）の成立・展開及びその関連事象に関する研究を行い、並列表現史の一端を明らかにしてきた。特に、古典語終止形にその来歴が求められてきた、上記の助詞の展開を中心に研究を進めてきたところである。そこで、今回の研究では、並列表現に与る形式には、他の表現形式からの転成によるものもある。これまで対象としてきたもの以外も対象とし、並列表現の史的展開について、さらに詳細な分析を施すことを試みようとした。史的変遷について、その体系的把握を試みるには、当然のことながら、まずは、並列表現に与る形式の一つ一つについて、その具体的な生成過程及び意味用法の展開を丹念に記述するという作業が不可欠であろうと考える。今回の研究では、こうした観点を以て、並列表現に与る形式のいくつかを取り上げ、並列表現史の一端をあきらかにすることを目指したものである。

２．研究の目的

本研究は、並列表現史を記述するにあたって、並列表現に与る形式のいくつかを抽出し、当該語法が如何なる過程を経て、助詞化したのか、また、並列用法を派生させるに至った言語的な背景を明らかにすることを主眼に置く。並列用法の発生の契機・要因を探るために、並列用法以外のものも調査対象とし、どういった用法から並列用法を派生させるのかを解明しようとする。また、当該語法の有する並列の意味機能についても、明らかにする必要がある。その為には、並列用法の発生源となった本来の用法との関連を視野に入れた考察が求められる。

３．研究の方法

平安期から現代にかけての、文献資料を調査対象とし、並列用法と見られる用例を採取する。採取した用例のひとつひとつについてその意味用法を確認する。その上で、当該語法の並列用法の獲得の経緯を明らかにし、さらにその後の意味用法の拡張の様相を丹念に記述する。並列表現史を記述する上では、個々の形式の有する並列の意味機能を明らかにしておく必要がある。その際、当該形式が如何なる表現から成立をみたのかという、成立の経緯を視野に入れた分析を施すことになる。そこで、並列表現の発生源である本来の表現形式の文法的性格に関するこれまでの研究成果を活用し、それと並列用法との関連を考えていくことにする。

４．研究成果

現代語において、接続助詞「し」は、並列を表したり、理由を表したりする用法（「むし暑いし、風はないし、まったく参った。」「お金はあるし、時間はあるし、映画でも見よう。」「家も近くですし、また参ります。」）があるが、この助詞「し」は室町期末頃に成立を見たようである。接続助詞「し」成立以前には、「―は（も）―古典語終止形終止形」という文形式を用いて、並列や原因理由を表していた（例：「大の男の鎧着ながら、馬より舟へがはと飛び乗らうに、なじかはよかるべき。舟はちひさし、くるりとふみかへしてンげり。（平家物語・落足）」、「平家のかたには馬に乗ッたる武者はすくなし、矢倉のうへの兵ども、矢さきをそろへて雨のふるやうに射けれども、敵はすくなし、みかたはおほし、勢にまぎれて矢にもあたらず。（平家物語・一二之懸）」）。本研究では、こうした終止形中止法を「不十分終止」用法と呼び、その表現性及び文法史的意義を明らかにしようとしたものである。

当該語法は、院政期頃、多用され、且つ、連体形終止法の一般化したとされる室町期以降にも口頭語で使用されていたと思しいが、文法史の上での積極的な意義については不十分であったように思う。そこで当該語法の文法史的意義を考察した。結果、当該語法の特徴は、列挙される事柄を理論上は、幾つでも並べることが可能な形式であること、さらに、列叙される事柄の間に時間的な先後関係が有しないという特徴が抽出される。こうした表現性を以て、室町期以降も、継続的に使用され続けていたものとの結論を得た。さらに、当該語法が、院政期に多用され始めたことについては、連体形終止法の一般化という文法史上の動態がその背景にあったものと想定される。なお、「不十分終止」用法の展開に関して、シク活用形容詞の場合、「いわゆる「シシ」語尾の形で現れる（例：是程にはぢめられたち打をもせぬこしぬけが。国のしつけんいたさんとはようもくいはれり。何と是でもしなれぬか。命はおしし所領はほししをしやほしやのがき侍。（今川了俊・一））。

「シシ」語尾形容詞の生成理由については、

口頭語の「―い」語尾を「―し」語尾に置き換えることによって成った語形であり、疑似文語形という性格を有するものとされてきた。従来のこうした捉え方では、「不十分終止」用法での使用の説明が上手く為されないように思う。

室町期以降では、形容詞型活用語の「―シ」語尾が「不十分終止」用法として機能していた（例：「そうじてそれがしハ、人の行なといふ所へハゆきたし、又ミなといふものハミたい、此ぶすハちとミたい事でハないか（祝本狂言「ぶす」）」、「五年このかたはつちが身のためにもわるし、ぬしのためにもわるいと、…（通言総籬）」）。シシ語尾形容詞の生成は、単に擬古化したものばかりではなく、「不十分終止」用法化による場合もあったのでないかと考える。「不十分終止」化と「シシ」語尾との関係であるが、これは、口頭語の「―イ」語尾が通常の言い切りの形で、「―シ」語尾は「不十分終止」であるという意識に支えられて、「い」語尾を「し」語尾に置き換える（例：「はげしい」→「はげしい」）ことによるものであろうと思われる。

上記の諸事項は、現代語に於いて、接続助詞「し」によって行われる累加的並列表現がどのような展開を経て今日見るような姿へ転じたのか、並列表現史の一端を明らかにした。

また、現代語において、並列表現に与るものに助詞「ば」による形式がある（例：世の中には善人もいれば悪人もいる。）。「ば」による並列表現の生成に関しては、以下の課題がある。助詞「ば」は本来、条件表現に与るものであるが、それが、如何なる経緯によって、並列用法にも用いられるようになったのか、さらにそうした並列用法が近世後期頃に発生したのかである。「ば」による並列表現の生成の背景には、「ば」による条件表現が本来の確定条件から仮定条件へとその性格を変容させていったことが関係していることを述べるとともに、並列用法の展開及びその意義についても言及した。

この他、並列表現史の事項として、「～ツ～ツ」形式による並列表現の消長の問題も取り上げた。当該表現は、院政期頃発生し、近世前期頃までは、動作作用の並列を表すものとして主要な形式であった。発生当初は、反復並列用法であったが、室町期以降、例示並列にも与るようになった（例：「踊っつ跳ねつして喜うで道を歩いた。（天草版伊曽保物語）…反復並列」、「狐出て、身が軽うて、よひと云て、鳴いつ、茶計と云つ、一郎やいと、云つして、罠の際へ行て、色々、仕様あるべし（狂言六義「釣狐」）…例示並列））。このように、用法を拡張しながらも、現代語では、「行きつ戻りつ」「差しつ差されつ」「組んずほぐれつ」といった慣用表現としての使用に限定されるようになっている。「～ツ～ツ」のこうした消長について、同じく動作作用の並列に与っていた「～タリ～タリ」形式の意味用法の展開を視野に入れ、「～ツ～ツ」の衰退過程を記述した。「～ツ～ツ」は、室町期から近世前期では、「反復並列」「例示並列」に与っていたが、まず、「例示並列」が早く衰退し、その後「反復並列」も衰退していくことになるが、それには、「～タリ～タリ」形式による「反復並列用法」「連用修飾用法」の獲得が関与したものとの見解を述べた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 京　健治，並列表現「～も…ば、～も…」形式の成立小考，『岡大国文論稿』，第 46 号，2018 年 3 月，43―54 頁，査読無

② 京　健治，古代語に於ける〈終止形による条件表現〉に関する考察―院政鎌倉期を中心に―，『岡大国文論稿』，第 45 号，2017 年３月，１～13 頁，査読無

③ 京　健治，接続助詞「たり」の展開覚書―江戸期の用法を中心に―，『国語と教育』、41 号，2016 年 11 月，216～228 頁，査読無

④ 京　健治，並列表現「～ツ～ツ」の消長に関する考察―動作作用の並列表現の推移補遺―，『西日本国語国文学』、第３号、2016 年 7 月，44～57 頁，査読有

〔学会発表〕（計４件）

① 京　健治，「シシ語尾形容詞発生の経緯一面」，中部日本・日本語学研究会（第 76 回），2017 年 5 月 20 日（土），「愛知県刈谷市総合文化センター（愛知県刈谷市）」

② 京　健治，文法史と「不十分終止」―近代語に於ける古形残存の経緯―，（平成 28 年度長崎大学国語国文学会，2016 年 11 月 26 日，「長崎大学教育学部（長崎県長崎市）」

③ 京　健治、並列表現「～つ～つ」の消長に関する考察―動作作用の並列表現の推移補遺―，第 65 回西日本国語国文学会（長崎大会），2015 年 9 月 20 日，長崎大学教育学部「長崎大学教育学部（長崎県長崎市）」

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
京　健治（KYO KENJI）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：60284014

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)